

「生活力」を育む家庭科学習
～「科学的認識」を家庭生活につなぐ～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

家庭科の学習は、人やもの、環境などのかかわりを大切にしながら、食べることや着ること、住まうことを扱っていく。学習対象は、家庭生活や家族、学校生活や仲間、自然や社会などであり、子どもたちを取り巻く環境そのものである。その子どもたちを取り巻く環境が多様化している。そのなかで子どもが自立する力や、家庭生活の意義や家族の大切さを理解する力など、自分の生活を豊かでより充実したものにしようとするための基盤となる力や心情を育むことが大切である。これらの力をもとにして、「生涯にわたってより健康的で快適な生活を創ろうとする力や心情」を「生活力」とした。このような力を育み、生活実践につなげていくこと、実生活への生かし方を身につけていくことが大きなねらいである。

具体的には、製作、調理などの実習や観察、調査、実験などの実践的・体験的な活動を重視した学習をすすめていく。このような活動を取り入れた学習は、子どもたちにとって楽しみなものであり、すすんで工夫を凝らしながら学んでいく姿をみとることができる。初めて家庭科学習をする5年生にたずねても、ほとんどの子どもが家庭科学習＝料理と裁縫というイメージをもっており、作ることに對する期待感が高い。

一方でこのような教科の特性を理由に、「生活を科学する」という視点が見落とされがちではないだろうか。毎日の生活の中で「感覚的に分かっている」「なんとなく知っている」ことの中に隠れた原理を学ぶことが、生活を意識したり、変えてみようと考えたりするきっかけになると考える。

①家庭科における協同的な学び

既知の事実には隠されていることわり、見えない原理、つまり科学的認識を得たとき、子どもは驚きや感動をもって自らの生活を見つめなおすことであろう。そこから生まれた気づきを書きとめたり、ペアやグループで話し合ったりすることで、「自分はこうしていきたい」という意思決定ができる。また、話し合いの中から、新たな問いが浮かび上がってくることもある。そこで適宜、ペア・グループ・全体で共有させ、課題解決していくようにする。

また、「わかる」喜びや「できる」喜びを実感し、生活にいかすなかで、家族とのかかわりが生まれる。家族にほめられたことを出し合ったり、うまくいかなかったことを出し合いその理由や根拠をもとにしてどうすればいいかを話し合ったりすることは、実践への意欲や自信につながる。このように吟味を積み重ねていくことは生活の意識化へとつながるだろうと思われる。無意識ですごしがちな家庭生活を意識することで、自分に必要な課題を見つけ、生活の中にかかしていくことができるのである。これが家庭科における協同的な学びである。

②家庭科における焦点化のポイント

学びに向かわせていく焦点化のポイントは、「既知のことに対して新たな視点をあたえること」だと考えている。そのために単元にはいる前に子どもの意識・実態調査をしておくことや新たな視点をもたせるための手立てとして子どもが五感を使って実感できるものを取り上げることに重点を置きたい。

また、本時の中での学びの質の高まりを意識した焦点化のポイントは、「経験的・感覚的な気づきから既習の学習をもとにした気づき・科学的な根拠をもとにした気づきへと変容すること」だと考えている。そのために、製作、調理などの実習や観察、調査、実験などの実践的・体験的な活動のなかでの子どもの気づきをみとり、個々の実態をつかんでおく必要がある。その上で話し合いをもち、何となく分かっていたことや何となく感じていたことを理由や根拠をもってとらえることができるようにしたい。そして、自分に取り込んでいけるようにする。

このように、「自分ならこれからこうしていきたい」という自己の課題解決につながるような新たな視点をあたえ、互いの気づきから学びの質を高めていきたい。生活認識が異なる子どもたちが同じように新たな視点をあたえられることによって、同じ土俵で考えることができ、三位一体の対話の中に吟味を生み出すことになるのではないかと考えるのである。

(2) 家庭科でめざす子ども像

手間ひまをかけて手作りしなくてもおいしいものが食べられたり、スイッチ一つで洗い物や洗濯、掃除ができたり、衣服を作るより買う方が安かったりする時代である。そんな中で、塾通いが忙しく、家事を手伝う時間的余裕などない子どもが多いのが実態である。しかし、子どもたちには、「家族の人の思いに気づいたり、自分を支える周囲の人々に感謝したりしてほしい。」「家族の一員としての自覚をもちできることをして行ってほしい。」と思っている。そんな思いから、下記のような子どもの姿をめざし、研究を進めていきたい。

① 生活の中に喜びを見つける感性をもつ子

「なぜだろう？調べてみよう」と関心をもったり、「自分で作るってなんて楽しいんだろう」「人のために何かできるのはうれしい。喜んでくれるのがうれしい。」など実感できること。感覚を働かせ、知恵をふりしぼって考え、工夫しながらやりたかったことをやりとげの中で育まれる感性である。

② 自分の家族や自分自身に誇りをもつ子

協同的な学びをしていく中で、自分の家族と友達の家族の違いや共通点が見えてくることになる。互いを認め合いながら、あらためて家族の思いに気づき、「ここに生まれてきてよかった」と家族の一員である自分自身に誇りをもたせたい。

③ 学びによって得られた生活力を生かし、自立していこうとする子

「やってみたことをほめられた、さらに工夫を凝らしてやってみよう」「うまいかなかったけど〇〇君のアドバイスで出来たぞ。」「なるほど、こんなふうにする理由はこうだったのか。それならもっといい方法があるぞ。次はこうしてみよう。」など創意工夫する子どもの姿が見られる学習をめざしたい。

2. 家庭科学学習における「学びの質の高まり」

家庭科学学習における「学びの質の高まり」とは“科学的認識をもとに生活にいかそうと工夫する姿”である。次のような3つの資質・能力を育成することが、「学びの質の高まり」につながると考えた。

その1つ目は、家庭生活を構成しているものや生活行為・行動にはそれぞれ意味があることや自分の家族や家庭生活の大切さに気づくことである。経験的・感覚的な気づきから科学的な根拠をもとにした気づきへと変容させていきたい。

2つ目は、日常生活に必要な基礎的な知識や技能を習得することである。生活の技能は、健康的な生活を営むために必要なものであり、これらの知識や技能を目的や状況に応じて活用しようとする際の基礎となる。

3つ目は、人とかかわりを考えながら日々の生活をよりよくしようとする実践的な態度である。例えば、ランチョンマット製作の中で、俊也のつまづきに寄り添う良樹の姿が見られた（写真参照）。良樹（写真右）は前時に同じことで失敗し、解決法をペアのさやかと模索して、一緒に直してもらった。そこで良樹は、同じ失敗をしてしまったしゅんや（左）のそばに行き、今度は一緒に直してあげてい



たのである。このように家庭科学学習で人とつながる良さを実感させていきたい。また状況を判断し、相手意識をもって実践できる態度を育てていきたい。

この3点を育てることが学びの質を高めることになる。

3. 研究の展望

研究テーマと関わって、子どもの実態をふまえながら「学びの質の高まり」に必要な資質や能力を育成するための手立てとして、サブテーマ“「科学的認識」を生活につなぐ”をポイントに、題材、学習活動を設定し、正しい認識力・判断力を育てていくよう、日々のはたらきかけを行いたい。

（1） 単元設定において

① 適切に体験活動や実習を入れ、「おもしろそう」「やってみたい」と、子どもたちの興味・関心を高められるように工夫する。5年生は、給食の時に使用するランチョンマット作りをした。使用目的がはっきりしているので、出来上がりがイメージしやすく、布選びからこだわりをもっ



て取り組んだ。家にある布を数枚選んできて組み合わせる子どももいれば、家の人と一緒に手芸店に行き気に入った布を買ってもらった子どももいた。洗濯をくり返してもほころびがでない丈夫なものにするために布目や縫い目にも気をつけて製作した。この活動で直線縫いの技能が身につく、丈夫なものにするために返し縫いをすること、角を美しくするコ

ツ、中表にして縫うとよいことなどを理解することができた。

②五感を通した直接体験をできる限り取り入れながら、実感を伴った具体的な学習を展開する。

③ペア実習や一人実習を取り入れ、技能の定着をはかる。アイロンがけの実習では、一人がやっている時、必ずペアのもう一人はそばで見ているアドバイスをする。これは、調理実習やミシン実習などでも同じようにしている。安全性が確保でき、見守ってくると安心して作業ができる子が多い。見て学び、やって学び、二人で知恵をしばって効率の良さを追究したり、失敗を乗り越えたりしていく。



④資料やグラフを利用しながら、実際の数値やその変化を示したり、実験を取り入れたりと、根拠のある科学的な見方を大切にし、自分の生活への必要性・重要性が感じられるような学習を展開する。

⑤現在の社会生活の中に起きている様々な問題、例えば環境問題と関連づけたり意識づけたりすることによって、身近な問題として実感させられるように工夫する。

(2) 日常生活での取り組み

家族の一員であるという意識をもたせるため、保護者の協力も得ながら、お弁当箱洗いやランチョンマットの洗濯などを継続してさせていきたい。また実習の後には、習ったことを自分なりにアレンジして、家で再度トライさせるようにしたい。長期休暇には、「夏の涼しい過ごし方に挑戦」「年末大掃除作戦」など家族と共に取り組めるようなテーマを与えて取り組ませたい。その際「トライカード」に記入し、授業で学んだことをどういかしたか、うまくいかなかった点はあったか、次はどう改善していくかなどの視点をもって、交流していくようにする。実際に家族のためにやってみて見えてくることや再認識できることも多く、家庭生活を見つめ直すよい機会になるだろうと考えている。

4. 研究の評価

各題材の学習後に自己の意識が変容したかどうかを評価していくことが、本研究の評価になる。そこで、単元の終わりには「自己の振り返りシート」を活用していく。また、体験的活動の内容に応じて、グループでの活動、ペアでの活動を取り入れ、自己評価だけでなく相互評価を取り入れていくことにする。互いに見合うことにより、自分だけでなく仲間のことも再発見でき、そのことが自己の変容につながることも期待できるからである。また、保護者による評価も子どもの家庭での変容をみる手立てとなり得る。

子どもが成長を実感し自分の生活への実践に意欲をもたせるための評価を積み重ねていきたい。